

## 第1章 図説の絵画製作と道具、材料の変遷

### 第1節 左官装飾図説の絵画製作と装飾部位の構図

#### 一、左官装飾図説の絵画製作と利点

伝統工芸は技と芸の融合を表す。技において、職人自身の技を鍛え、熟練し、長年に基礎技術を培いながら上達していく。芸の方をいうと、工夫に重点を置き、画面全体のレイアウト・アレンジとディテール表現を拘り、作品の完成度を握る鍵ともなる。

「左官装飾図説」とは左官装飾職人が左官装飾に関する図説の絵画製作。剪粘図説、交趾焼図説、泥塑図説、鏝絵図説、左官彫刻図説なども含むものとする。昔、年老いた伝統職人が入門したばかりの弟子を教えるとき、先ずは下絵の模写と描きを習わせ<sup>1</sup>、姚自來職人を例として、姚自來が廃棄したセメント袋や線香袋を集め、弟子に夜や暇なときに各種の花鳥文様を描かせ、基礎ができてから竜虎等のような複雑な紋様を描かせる<sup>2</sup>。こうした過程の中で師匠は弟子が画像の描画に対する腕を評価し、更に弟子の根性を試練し、これらを認めてから本番の製作工程に取り組んでもらう。



【図1-1】王保原の前殿剪粘略圖（引用黃秀蕙、「巧手天成」p90、2011年、台南市：台南市政府文化局）

左官装飾図説の絵画製作は、その評価額をつけるために役立つが、しかし全ての職人が作成できる能力を持っているわけではない。デザインのアウトラインはよく他者によってなされ、例えば、絵師が図面や設計を代行し手掛けることもある。以下、例として陳世仁、柯國聯と王

<sup>1</sup>姚自來職人のインタビュー（2004/6/17、場所：林口竹林山寺）

<sup>2</sup>姚自來の弟子姚栄次：「晚上都在畫圖，畫花鳥，草仔龍虎都有」と言った。姚栄次職人のインタビュー（2004/4/11、場所：景美自宅）

保原職人達の場合は、デザインを用い補足説明、また設計とその執行過程を行う。剪粘職人の絵図製作は、主に立面図法が使われるが、少数の職人のニーズによって、断面図や透視図も加えられる。

図説あれば、左官装飾デザインにおけるアウトライン作成の利点：

### 1. 評価額をつける。

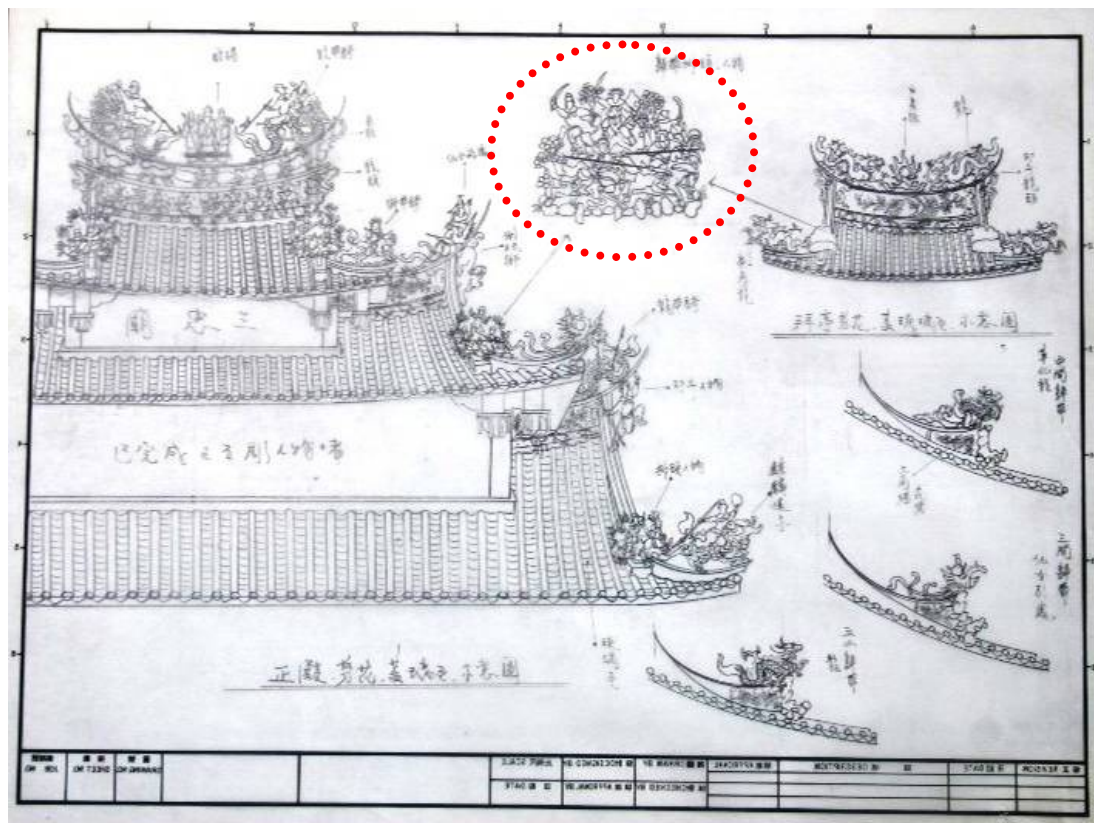
業主にかかる経費、作品題材の影響、施工時の質や量の目安となり、業主への見積もりと予想評価額のリストとして提供される<sup>3</sup>。これは金銭額を提示するだけでなく、将来的に両者合意した事に対しての紛争の発生を減少させる目的もある。

### 2. 価格に対する助言と値引き交渉に役立つ。

業主が職人を選んだ後、図面により内訳の詳細な見積もりが出され、それから交渉や工程の修正などの段階に進むことができる。寺院・廟は普通、それらの信仰する神、あるいは神話の内容によって題材を決める。例えば、媽祖廟の多くは女性を主役にした物語で構成されている。討論した上で、最終決定案を出し、再び業主は正式に、価格交渉の請求を始める<sup>4</sup>。

### 3. 職人が見せる技量と業主に対する信頼の獲得。

全ての職人が絵図製作の技法を備えているわけではなく、多くの場合代筆者に図面を描いてもらうが、もし、業主との交渉時、絵図をもって補足説明が行えるなら、業主からの信頼が更に得られやすくなる。



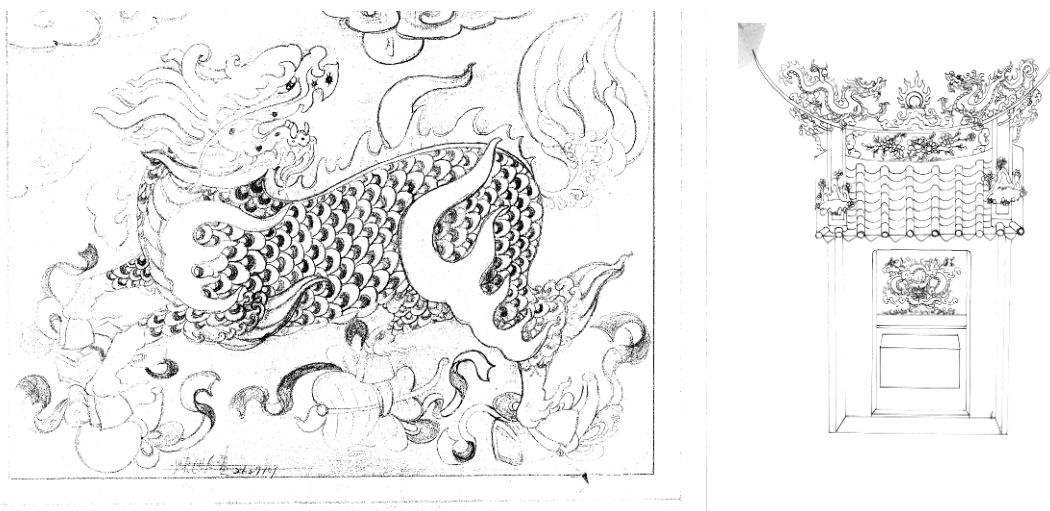
<sup>3</sup>図面をつくる目的は、工事請負契約など、注文者と請負者の間で相互の食い違いがないようにするためです。どのような工事をしなければならないかを工事現場に伝達するためです。

<sup>4</sup>陳世仁職人のインタビュー（2009/8/24、場所：台北工作室）

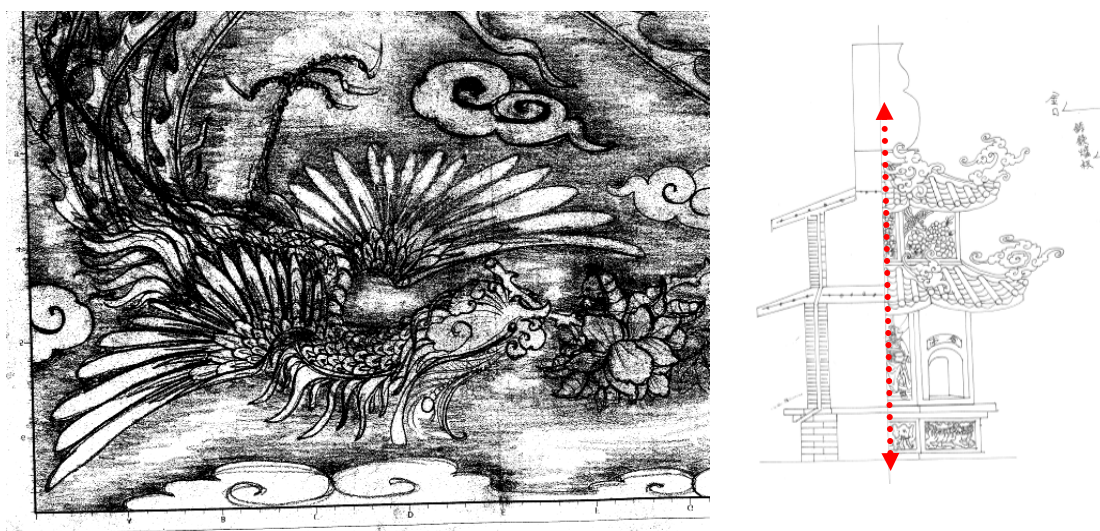
【図 1-2】陳世仁景福宮屋頂と細部説明（陳世仁提供）

下絵<sup>5</sup>は職人にとって正に楽譜が指揮者にとるものに等しく、両者はお互いに補完しあうものである。下絵の製作は完全に伝統方式ばかりに頼るのでなく、工事の規模と制限によって考慮すべき、心の中にある初期段階のイメージを具体化させる。特に工事を請負うときにおいて、説明するために下絵を描きあげ、仕事を発注する寺院に参考にしてもらうことができる。

陳世仁表示：「このような下絵は屋根が尖り、竜、鳳凰と麒麟が舞い飛ぶのが一般的である。発注者の要求に応じて更にディテールの下絵を製作し、これをもって発注者と意思疎通の媒体とさせる。」



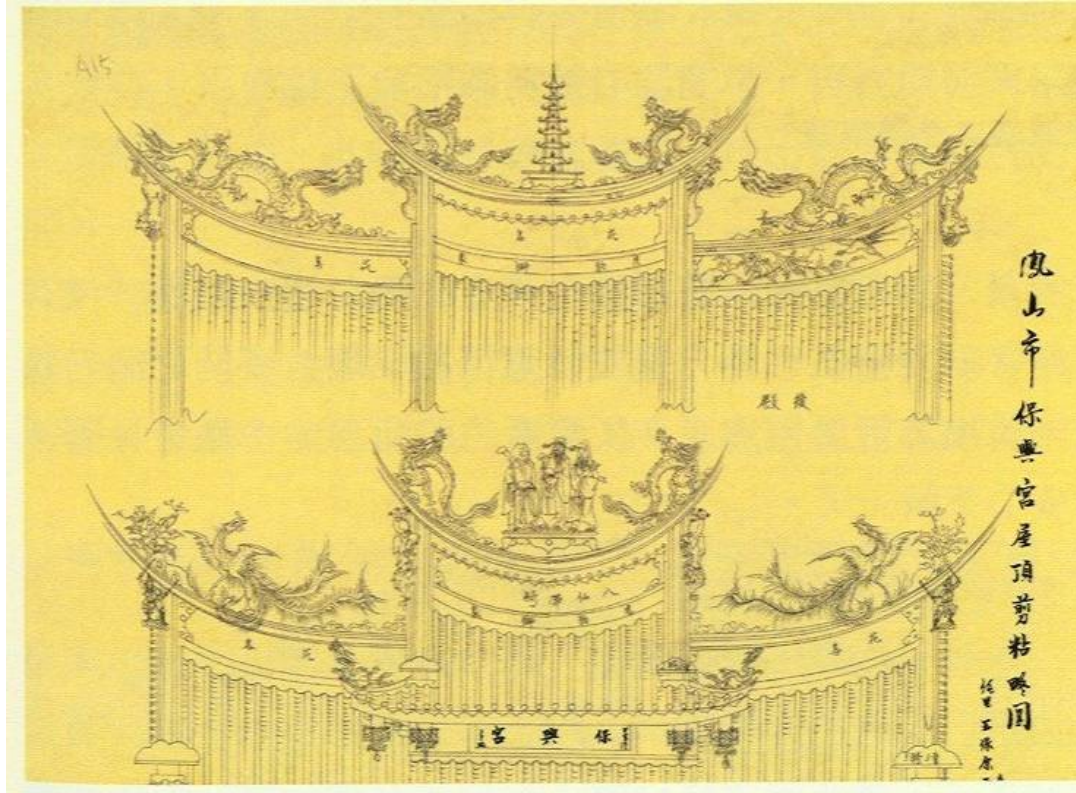
【図 1-3】陳世仁の麒麟下絵と寺廟立面図（陳世仁提供、筆者複写）



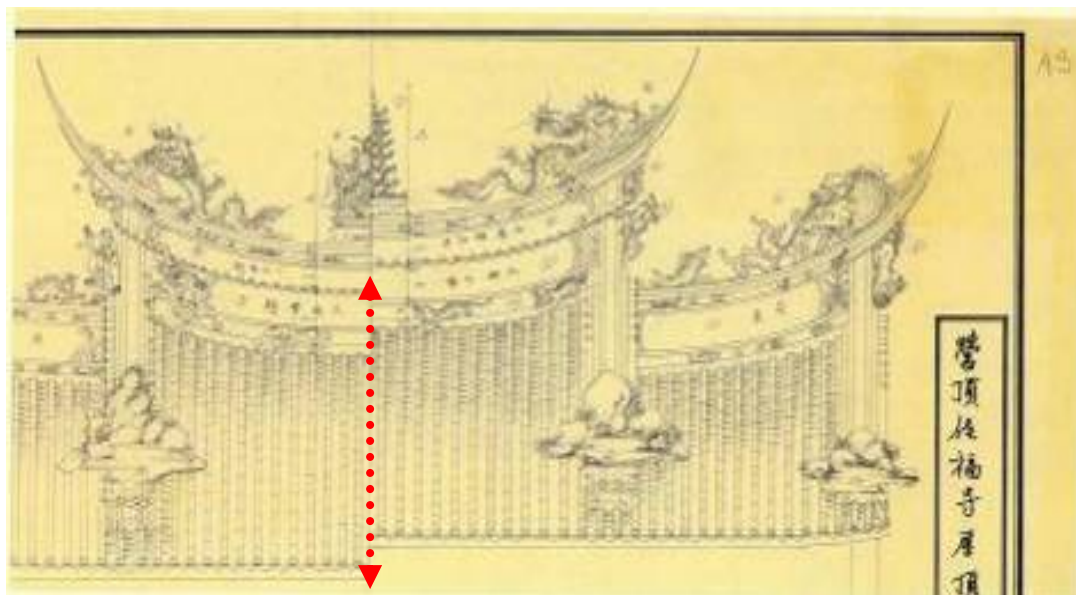
【図 1-4】陳世仁の鳳凰下絵と寺廟金亭の断面図（陳世仁提供、筆者複写）

<sup>5</sup>目下において弟子入り制度が廃れ、年配の伝統工芸職人も記憶が薄れ、更に凋落していく中、伝統工芸を伝承するには幾多の困難と制限があり、故に残された下絵から昔の伝統工芸を認識するのはせめてもの方法としか言えない。

以下、例として王保原職人の場合は、デザインを用い補足説明、また左官装飾設計とその執行過程を行う。剪粘職人の絵図製作は、主に立面図法が使われるが、少数の職人のニーズによって、断面図や透視図も加えられる。



【図 1-5】王保原の「鳳山市保興宮屋頂剪粘略圖」(引用黄秀蕙、「巧手天成」p93、2011年、台南市：台南市政府文化局)

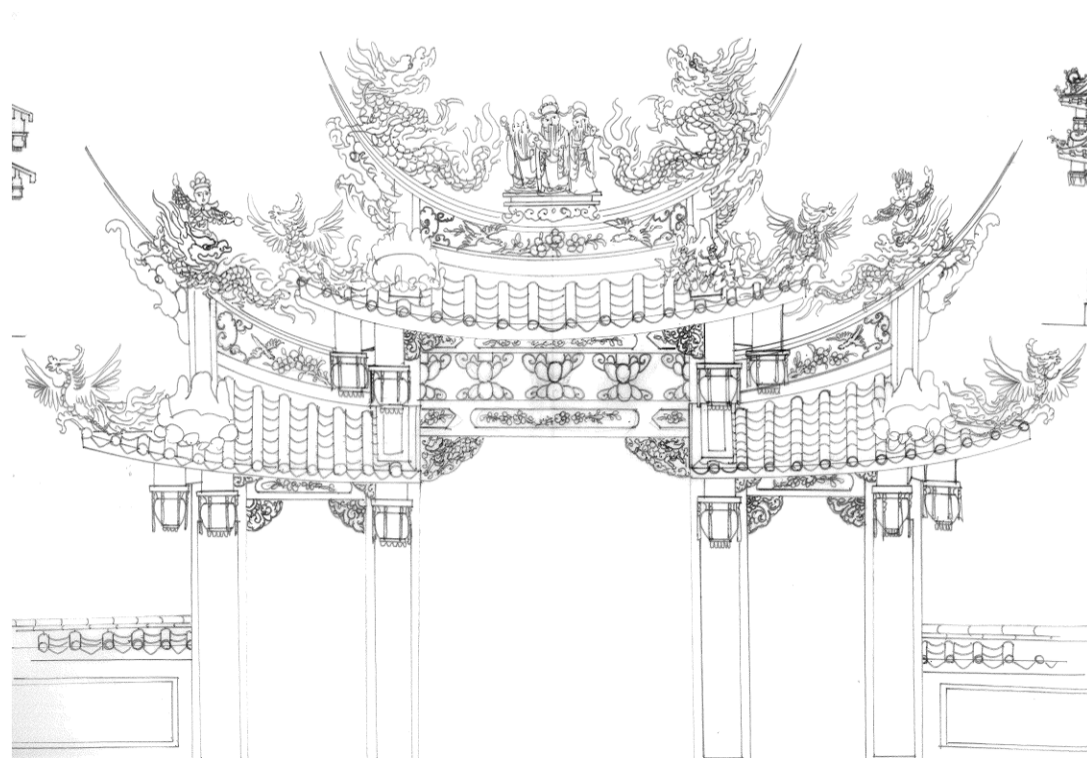


【図 1-6】王保原の「營頂佳福寺屋頂剪粘略圖」、左の辺りは前殿、右の辺りは後殿(引用黄秀蕙、「巧手天成」p92、2011年、台南市：台南市政府文化局)

職人が鉛筆書きの建築立面図を用いる時、まず水平の基線を書き、中軸線と両側の壁線を書き加える。それから、屋根までの高度、軒の線（簷線）、瓦のサイズ、ドアや窓の開け口、主となる部分の位置を示し、手描き製の屋根の外観を描く。ここで重要な事は、モダン建設の教養がある場合、デザインの工程は地面の基礎から上方を描くことに対して、職人は違う手法を取ることである<sup>6</sup>。

剪粘職人の場合、まず屋根の部分を詳しく描き、そこから下方のアウトラインを描くのである。これは剪粘職人の作業部分に関係し、剪粘職人にとっての図案の重点は、各種装飾物の配置、その大小、スタイルや造型のわかりやすさ、また視覚効果になるからである。それ故、屋上に置かれた龍や鳳凰、宝塔などは詳細に描かれ、脊堵と排頸の部分は複雑にすることを避け、一般的に施工させたい題材は文字で標示する。

大棟（屋脊）と両側の鳥衾瓦（燕尾）の形状は、高度を必ず皆一致させ、中軸線をもって対称のバランスをとる<sup>7</sup>。例えば、大棟の一方に龍、一方に鳳凰を設置することは不可能で、この対称的特性が伝統的な建築様式である<sup>8</sup>。



【図 1-7】大門の建築立面図（陳世仁提供）

<sup>6</sup>陳世仁職人のインタビュー（2009/8/24、場所：台北工作室）

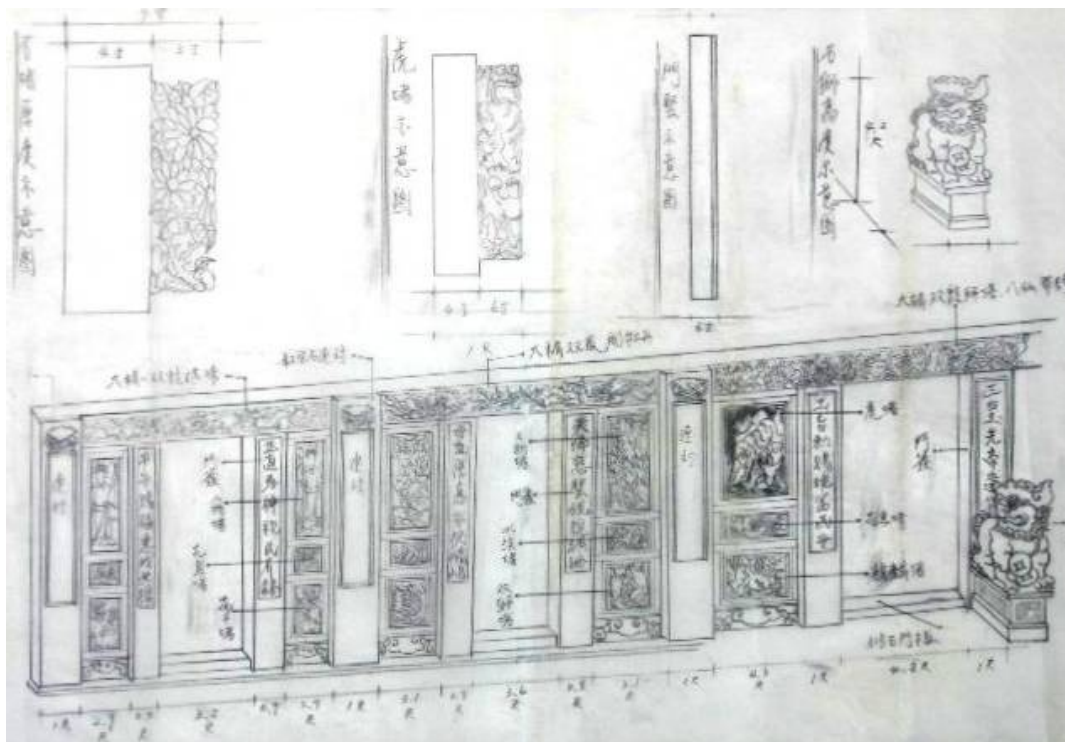
<sup>7</sup>建築中軸線をもって対称のバランスは同じ動物、水紋、花飾である。

<sup>8</sup>幾人かの職人は、まず片方の大棟と装飾デザインを描いた後、透明のセロハンでコピー、裁断をし、もう片方を成形する。これにより、全く相対称のデザインができ、この工程は完成する。

屋根の下の壁( 塙身 )の面も当然、両側でバランスを取っていなければならない。時に時間節約の為、中軸線を境界にして、左側を前殿、右側を正殿としたり、また前殿の立面図は非常に詳細に描くのに対して、正殿に関しては、一部のみを描き、全体は描かず、文字だけで説明することもある。職人はこのようにして相互の意思疎通をし、時間を巧みに使いつつその工程を進める。

塙身の装飾が岩でなく泥壁で鏤絵<sup>9</sup>造成されているなら、龍柱、石獅、塙面の装飾は職人にとっての力量を発揮できる箇所である。例えば、龍柱は2匹の龍がお互いに向かい合っていたり、蟠龍<sup>10</sup>が伸び上っていたりという描写がはっきりとわかる。もし、塙身の造成が剪粘職人の手によるものではない場合、斗拱( 柱の上であり、軒など上部構造を支える部材 )や石彫( 石彫り )のように簡単な線で表したり、文字で標示される。

陳世仁が全ての是廟建設の工程( 石造、木造、土への水彩塗り )を請け負う場合、各方面からの平面立図、断面図、細部まで記した全体図や透視図を描くところから始まる、また配置図も含まれる。建築士法の公布後、新しく建設する廟の為の認可印が建築士により押される。しかし、建築士はモダン建築の訓練を受けているので、伝統的建築に関してはあまり口を出すことができない。それにより、廟側は職人に主導設計を依頼をすることになる。建築士の方は建築許可の申請などに関わる書類の提出に携わることで、両者の職分を補っているのである。



【図 1-8】陳世仁がお寺前殿の立面図は非常に詳細に描く( 陳世仁提供 )

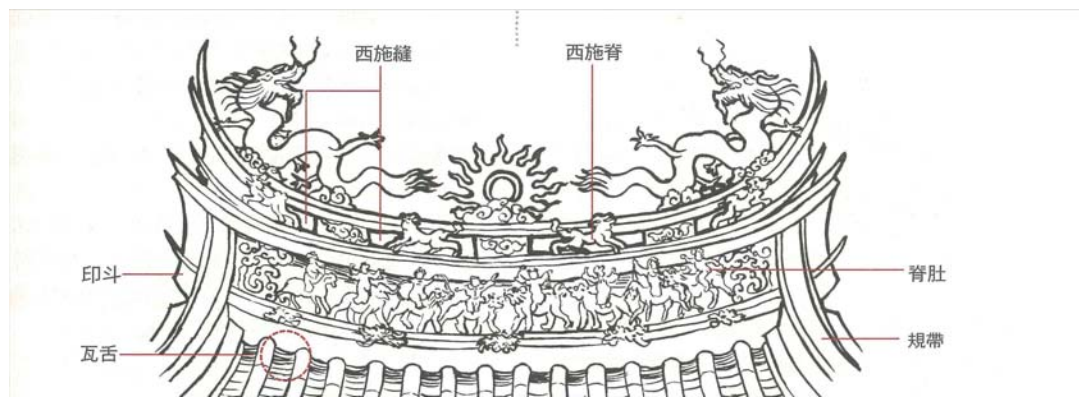
<sup>9</sup>鏤絵とは、左官職人が壁を塗る鏤( くて )を使って描いた漆喰の絵のこと

<sup>10</sup>蟠龍は地面にうずくまり、とぐろを巻いた龍。

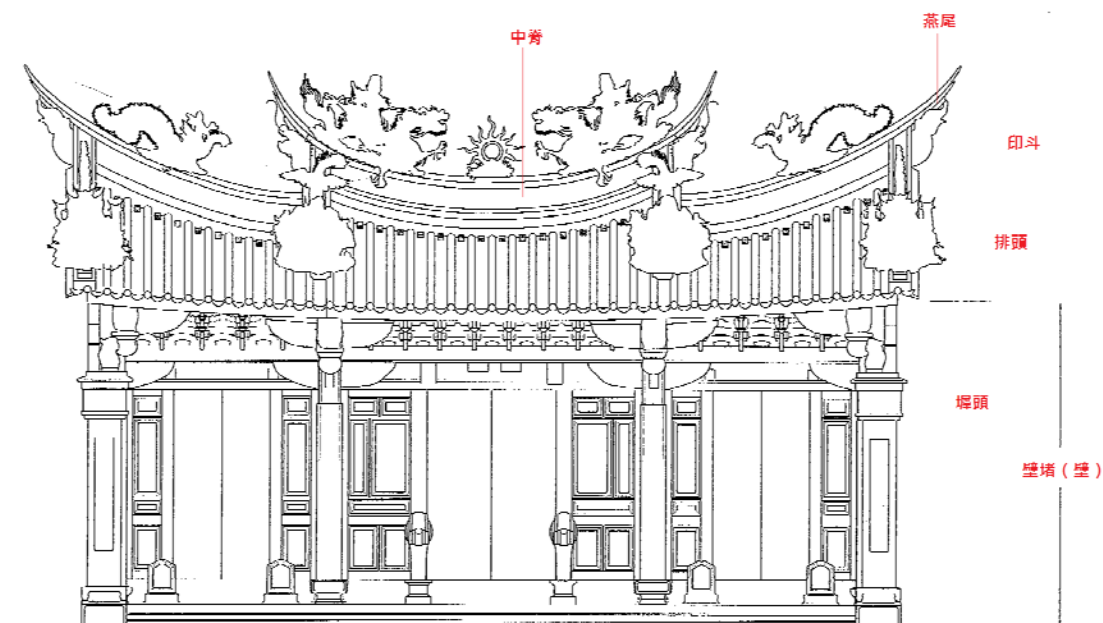
## 二．装飾部位から見る構図の原則と技巧

構図とは、作者や職人達が美学観点の解釈を表すものである。伝統建築職人が弟子入り制度による養成教育過程の中、木造、石造、左官装飾など作品の表現方法に対して題材選び或いはキャラクターの形作り等において、決まった職人伝承システムを頼っている。

故に決まった構成と寸法の制限に置かれ、如何にして表現したいイメージをはっきりと表せるのは、全てが職人の構図工夫により、これもまた作品の価値をいうファーストポイントになる。左官装飾作品のレイアウトとアレンジに関して、主には飾られる場所、形及び寸法によってその構図の方向を決める。その中に作品が飾られる場所の違いによってその表現方法も変わってしまい、デザインの基準は主人公の数及び創作題材を考慮に入れている。



【図 1-9】屋根装飾部位の名称（引用李乾朗、「台湾古建築圖解事典」p 111、2003 年、遠流出版事業有限公司）



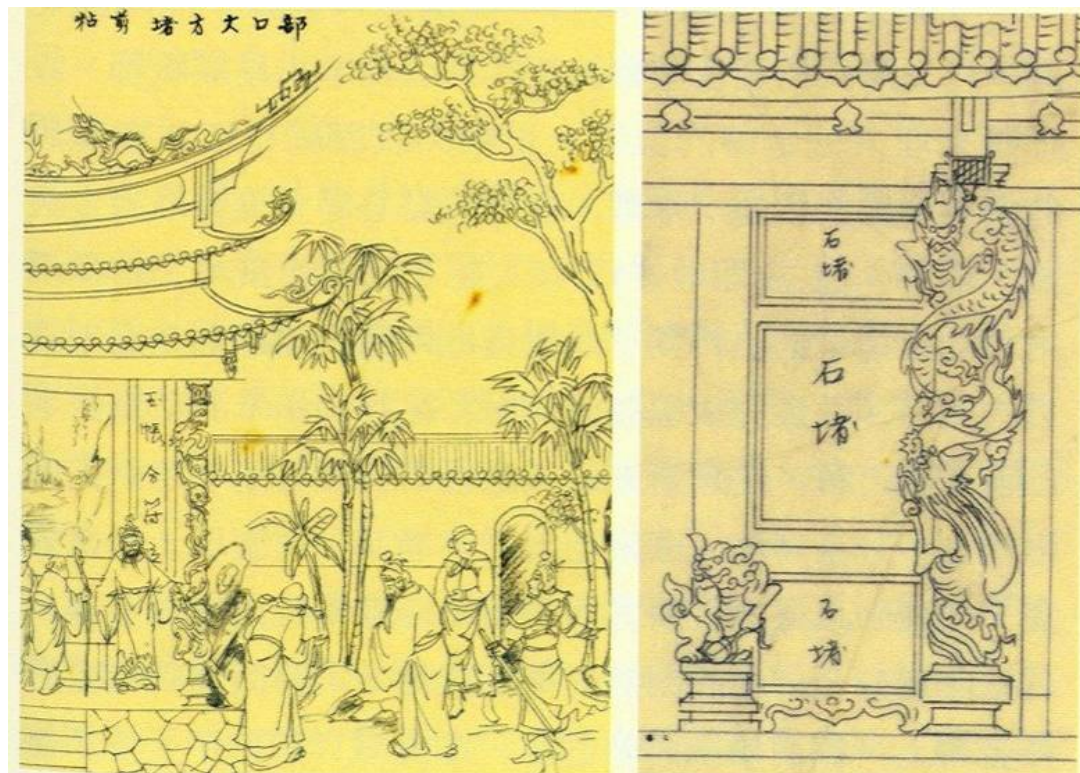
【図 1-10】伝統建築立面の装飾部位の名称（説明図は新竹城隍廟前殿の建築立面）

各堵のデザインは武場<sup>11</sup>と文場<sup>12</sup>の2つに区分される。施工前に、まず堵の大きさや設置する人物等の数量を考慮し、その後、空白の部分を山や樹木で補う。角の空白に題名と落款を書き残す。武場の場合、水車堵のサイズが約2～5尺なら、三騎五童が設置される。この三騎五童というのは騎馬または他の動物、三騎と五人の童子らを配置し、一つの主題を構成する。もし、堵のサイズが約5～8尺となれば、五騎八童が設置される。

文場の題材は4尺の水車堵で多くの場合使われ、約5～6人の文官か童子が置かれる。しかし、水車堵の空間の大小によって、その人数は決められる。また、時により、廟側の経費の増減によっても変化し、当然予算が多ければ、充実し纏まった構図が完成する。



【図 1-11】陳世仁鏤絵作品のデザイン（筆者撮影）



【図 1-12】王保原の剪粘略圖（引用黃秀蕙、「巧手天成」p92、2011年、台南市：台南市政府文化局）

<sup>11</sup>武餉は武将、脇役、背景から成る組み合わせで、脇役は兵士、背景は山や樹林である

<sup>12</sup>文餉は、文官や女官、童子、山、樹林からの組み合わせとなる。



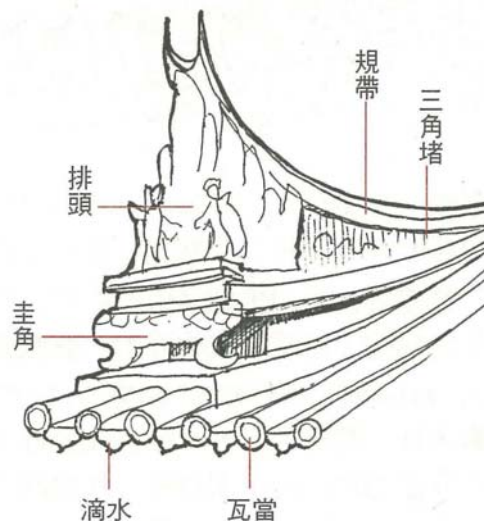
## 1. 排頭の構図

排頭、設置場所は屋根から突き出た平台の位置にある。これは、距離が遠くなると、鑑賞者からの視覚仰視角度が大きくなるため、必然的にその人物が前傾する傾斜角度も大きくなる。そのため、このように鑑賞者が見上げるような角度の場合、その人物はちょうど観察者の方へ向くようになる。

一方、主役の人物の見せ方については上下二層式の製作が採られていて、下層には通常、「武將帶騎<sup>13</sup>」主人公が馬に騎乗する姿を設置し、上層には人物と背景が設置される。これにより、空間の増加の働きを持たせるだけでなく、主役とその他の人物との位置関係を強く示す事が可能となっている。

「触れられる」視覚効果で、地位の違いによる主従関係を表し、倫理的秩序、はっきり区分された階級層も現している。図に見られるように、將軍の位置は後方の人物より低めに設置されており、これは全体像と部分像を組み合わせた関係にすることで、メインの位置とサポートの位置を強調させられるからだ。

視覚的に屋根の排頭が目立つが、活動的な人物の白熱したストーリー（武場<sup>14</sup>）が題材になっている。早期に行われた緻密かつ入念な調査研究により、背景の亭台樓閣は実際の寺院・廟を模して設計されており、屋根の曲線や細部では瓦を流れる細部の滴なども見られる。また、もうひとつ強調したい箇所は、武將の衣服の皺、その姿勢などにおいてその英姿が伺えることである。



【図 1-13】排頭の位置（引用李乾朗、「台湾古建築圖解事典」p112、2003年、遠流出版事業有限公司）



【図 1-14】排頭の設置場所は屋根から突き出た平台の位置（筆者撮影）



【図 1-15】排頭の人物が前傾する傾斜角度も大きくなる（筆者撮影）

<sup>13</sup>武將帶騎のは、主人公が馬に騎乗する姿である。武將帶騎は剪粘職人や交趾焼職人が慣用の言葉である。

<sup>14</sup>武齣（または武場） 武齣は武將、脇役、背景から成る組み合わせで、脇役は兵士、背景は山や樹林である。



【図 1-16】視覚的に屋根の排頭が目立つ（筆者撮影）



【図 1-17】武將（筆者撮影）



【図 1-18】地位の違いによる主従関係を表す（筆者撮影）



【図 1-19】三層式の排頭（筆者撮影）



【図 1-20】主役の人物の見せ方については上下二層式の製作が採られる（筆者撮影）



【図 1-21】主役の人物の見せ方については上下二層式の製作が採られる（筆者撮影）



【図 1-22】主役の人物の見せ方については上下三層式の製作（筆者撮影）

## 2. 塀頭の構図

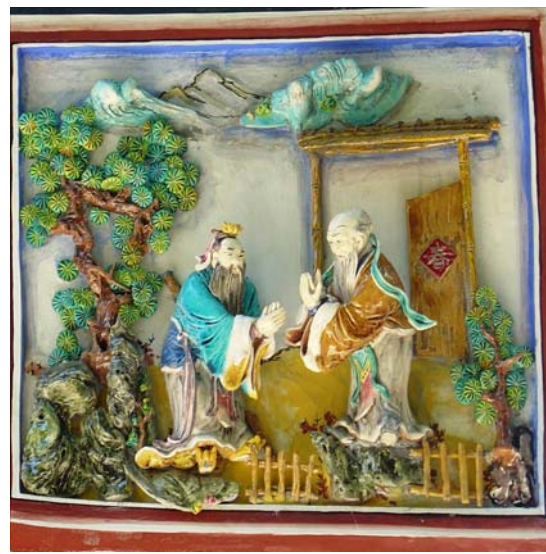
塀頭は屋根と壁の接合部に位置し、長方形または正方形の外枠を有する。構図は比較的簡単で、連続的な物語のいきさつを表し、人物の主題の選択では、基本的に一人または二人を主役とする。

物語の内容は単純で、静態的な場面で構成される。例えば、台北孔廟姚自來の孔子の儀礼を問う場面では、画面中央に主役と脇役を同列に並べる事で、両者のサイズは近づき、いわゆる主従の分がなくなる。これで、二人の姿態や表情などの表現が強調できる。

主な背景は彩色され、樹木などの微細な部分は切り貼りで装飾されている。全体的な構図では、主従同並列の技法により、図柄が安定し、また荘厳な感じが出るので、水墨画のような質感も与えられる。



【図 1-23】塀頭の物語の内容は単純で、静態的な場面で構成される（筆者撮影）



【図 1-24】孔子の儀礼を問う、画面中央に主役と脇役を同列に並べる（筆者撮影）



【図 1-25】台北保安宮、静態的な場面で構成される塀頭（筆者撮影）



【図 1-26】台北保安宮、三層式の塀頭（筆者撮影）



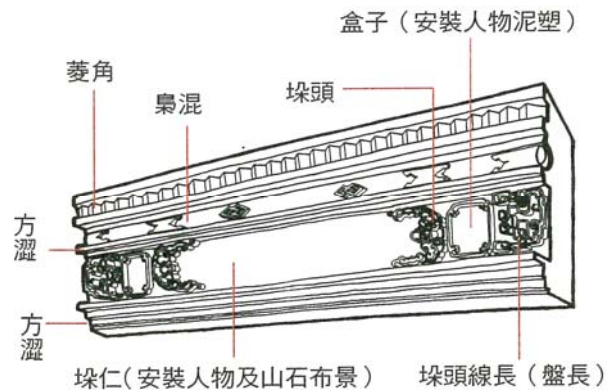
【図 1-27】八仙と童子（筆者撮影）

### 3. 水車堵の構図

水車堵は壁の上方に位置し、水平方向に細長い構図となる、題材は人物の物語で、職人により物語の最も興味深い箇所を抜き取り表現される。そして、人物の物語は横方向に配置される。サイズに応じて、1ブロック、3ブロック、5ブロックというように、ブロック毎に分割することがあり、カラー印刷のレイアウトのように、側部のブロック(堵頭)と中間のブロック(堵仁)とに分けられ、両サイドの堵頭がサポート側、堵仁が主役側となる。

水車堵が長過ぎる場合、通常3分割される。堵頭を使い間隔をあけ、その比例は約1:2:1となり、各部分で違うストーリーが展開されている。

この図では、中間部の堵仁には、主格の武将の華々しい戦の模様が主題となり、人物は皆騎乗しているのが描かれている。反面、左右両端の堵頭では、物静かなストーリーが描かれ、中間部を引き立てる役割をしている。



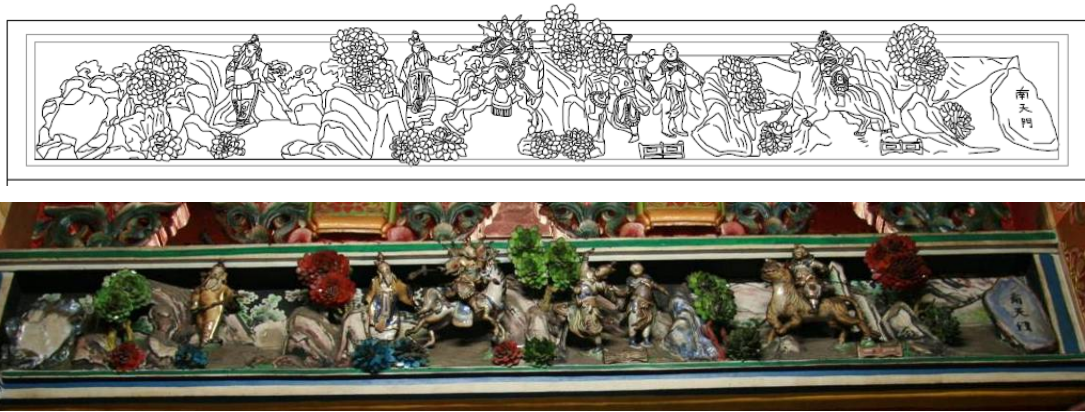
【図 1-28】水車堵の構造（引用李乾朗、「台湾古建築圖解事典」p 76、2003年、遠流出版事業有限公司）



【図 1-29】姚自來の渭水聘賢、人物の物語は横方向に配置される（筆者撮影）



【図 1-30】水車堵は水平方向に細長い構図となり、堯帝と大舜二人の姿態や表情などの表現が強調できる（筆者撮影）



【図 1-31】封神演義題材「南天門」の水車堵構図と作品現況（筆者撮影）



【図 1-32】三国演義題材「許褚裸体戦馬超」の水車堵構図と作品現況（筆者撮影）



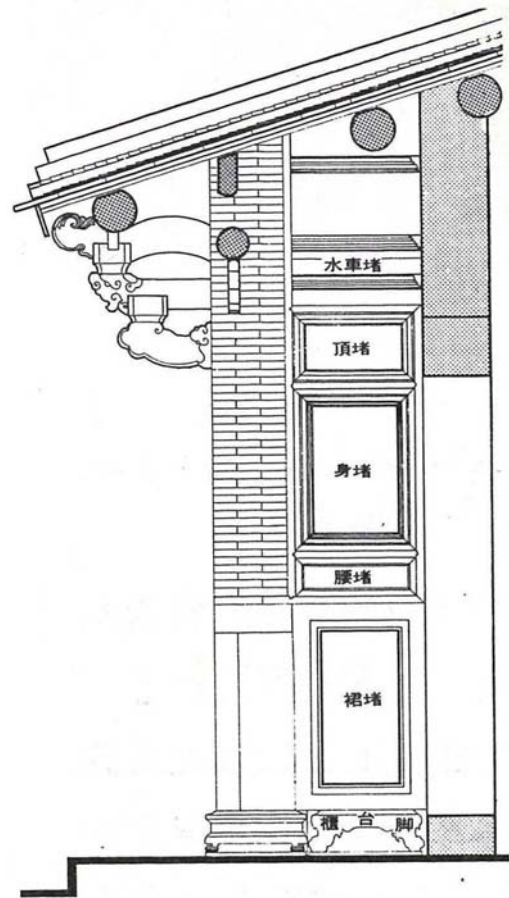
【図 1-33】三国演義題材「斬蔡陽」の水車堵構図と作品現況（筆者撮影）

#### 4. 壁堵の構図

壁堵の構図に関しては、まず水平方向になることを考慮し、また上下部の関係に対応させることに注意を払う、人物の配置は避け、窮屈で逼迫したようにせず、視覚焦点と視覚バランスが取れるようにすることが最も重要になる。これはその他の比較的高い位置にある装飾と違い、鑑賞者は正視の角度になるため、作品は外側に傾斜させる必要がなく、正面を向いている。常に中軸線をもって左右対称になるようにデザインされる。

主題により焦点させる箇所は異なり、例えば、四鳳亭ならば屋根にいる猿の動態を強調し、八苑園ならば、八人の仙女の軽やかな姿態と立ち位置を強調させる。壁堵は比較的深度が浅く、手で触れる等の原因で容易に壊れる恐れがあるので、通常ガラスで保護されている。その為に水車堵のように人物や背景を外側に傾斜させたり、面積を増加させたりする事ができない。

背景の家屋や樹木・山石等はその場合彩色され、少しの部分で切り貼り装飾が施されている。図面の底部に重厚感を持たせるように、一般的な手法では山や岩のような背景を塑製し、底部を盛り上げ、人物を上部に設置する、これにより、頭部に重点があり、脚部が軽くなるような視覚情景を避けることができる。



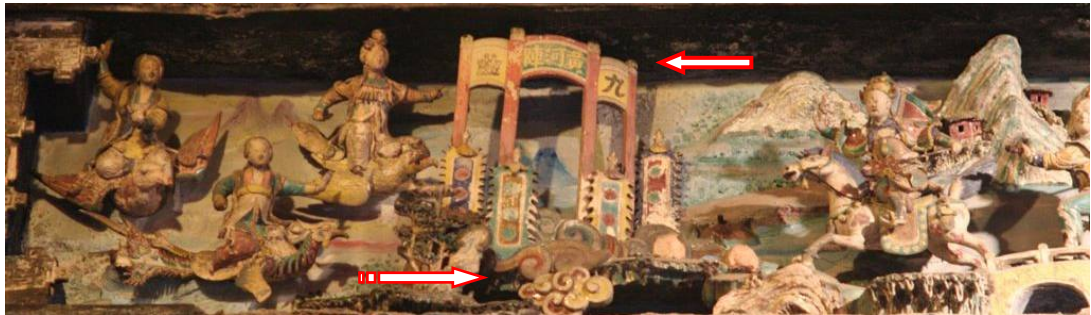
【図 1-34】壁堵(壁)の位置と名称(引用林會承、「台湾傳統建築手冊」p 54、1990 年、藝術家出版社)



【図 1-35】北港朝天宮の前殿壁堵(筆者撮影)



【図 1-36】台北保安宮正殿の虎側の壁堵（筆者撮影）



【図 1-37】人物の配置は避け、窮屈で逼迫したようにせず、視覚焦点と視覚バランスが取れる（筆者撮影）



【図 1-38】四季平安と祈求吉慶の構図、鑑賞者は正視の角度になる（筆者撮影）



## 5. 神棚の構図

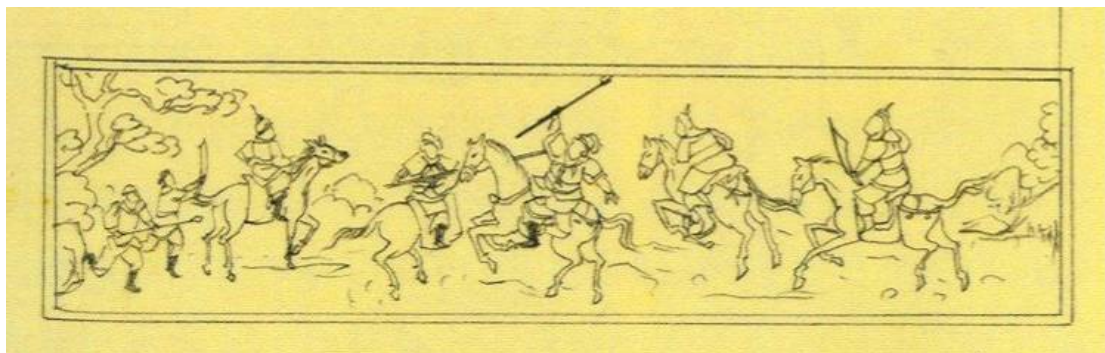
神棚の位置は鑑賞者の俯角または水平角にあり、構図配置の難度が高い。作品はアクセシビリティを持つため、人物のボディは精細かつ疎かにできず、画面も水平方向の考慮のみならず、上下の対応関係にも注意しなければならない。神棚の構図がバランスを失ってしまえば、上重下軽な圧迫感が生じやすくなるためである。視覚が及ぶところであるため、作品のレイアウトは外側に傾斜させる必要が無く、正面が主である。



【図 1-39】通宵慈雲寺神棚の（筆者撮影）

武場は両部隊が戦を交わす画面。神棚で武將は面と向かって敵対する方法で現れ、主役の二人は見つめ合っている。視線は画面の中央に集められ、上方には一人の兵卒を置いて、主役と三角形を排列し、安定した画面を構成している。その他兵卒はそれぞれ主役背後の位置に置かれ、基本的に上下交錯の形式で排列されている。武將が部隊を率いる戦は、彼らの間の距離に集散遠近の関係があることを考慮する必要があり、互いに視線を交わすことで呼応を形成している。

画面排列は韻律に富んだ曲線が形成され、画面人物の走向に従って流動し、武場制作にあたり、職人が求めていた賑やかさと活発さを伝えている。



【図 1-40】王保原の剪粘堵の略圖（引用黄秀蕙、「巧手天成」p93、2011年、台南市：台南市政府文化局）



【図 1-41】通宵慈雲寺神棚の焼き物の構図配置（筆者撮影）



【図 1-42】神棚の位置は鑑賞者の俯角であり、構図配置の難度が高い（筆者撮影）

## 第2節 左官装飾技芸の使用道具、材料変遷と特色分析

### 一、使用道具と特色

この節については、山田幸一の『左官工事 材料と施工法』<sup>15</sup>と佐藤嘉一郎の『土壁・左官の仕事と技術』<sup>16</sup>を参照した。

#### 1. 「型折」と「噴霧器」と「人造用ブラシ」

蛇腹<sup>17</sup>用型折は、蛇腹・線型の型引用鉄板を折り曲げる際に使用する。噴霧器は人造石洗出しの表面を水洗いすることによって、混入された種石を露出させる。人造用ブラシは、次の数種の目的に使用する。人造石洗出しの場合、噴霧器をかける前に塗付面を洗滌する<sup>18</sup>。



【図 1-43】型折 (筆者撮影)



【図 1-44】型折 (筆者撮影)



【図 1-45】噴霧器バルブ(筆者撮影)



【図 1-46】噴霧器の底部(筆者撮影)



【図 1-47】噴霧器 (筆者撮影)



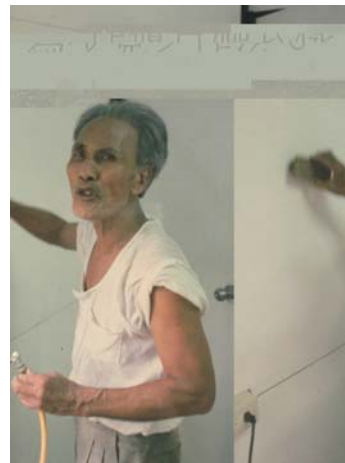
【図 1-48】噴霧器 (筆者撮影)



【図 1-49】噴霧器の実演(筆者撮影)



【図 1-50】人造用ブラシ(筆者撮影)



【図 1-51】ブラシかけの実演 (筆者撮影)

<sup>15</sup>参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版) 株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年。

<sup>16</sup>参照佐藤嘉一郎 佐藤ひろゆき、『土壁・左官の仕事と技術』、学芸出版社(京都)、2001年1月。

<sup>17</sup> 蛇腹(ジャバラ、じゃばら)仕上げに用いられる型を作る為の道具。

<sup>18</sup>参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版) 株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年、pp.183-193。

## 2. 「鏝（こて）」

こては職人にとって欠かせない道具で、その種類も形も様々である。職人の間では一般に「灰匙仔」と呼ばれている。灰匙仔（鏝）は台湾剪粘職人、鏝絵職人、交趾焼職人等にとって大変重要な道具である。鏝のヘラ部分の材質により価格も大きく異なる。小型のこてほど建材店舗では入手しにくく、職人たちは自分の手になじむものを注文製作する。自分でデザインしてから鍛冶職人に製作を依頼するのがふつうである。台湾左官職人陳金福、陳適庸のインタビューによると、他の鏝工具は 人造用本焼中首<sup>19</sup>、 人造用本焼元首<sup>20</sup>、 半焼きの塗付け鏝<sup>21</sup>、 煉瓦こて<sup>22</sup>、 面引き鏝（面引き作業に使用される鏝。丸面とは角がRになっている形状の物を指す）などである。使う場所や材料によって使い分けるため、膨大な種類がある。鏝は日本左官職人または台湾の剪粘職人、鏝絵職人にとって一番大事な道具である。

## 3. 鏝の使い方

手首で塗るな、腕で塗れ、いな身体で塗れ<sup>23</sup>。

これは、手先の器用さで塗るな、腕いっぱい動かして塗れ、身体全体で大きく塗れと、示したものである。

こては左から右、下から上に動かせ<sup>24</sup>。

これは塗材の材質からきたものではないだろうか。粘りと、塗材の落下を防止するためのこての操作を示したもの。しかしこの逆もあるわけで、返しこて、さかさこての操作もあるが、その基準をわかりやすく示したものと思う。尾辻國吉の「台湾建築界の回顧」<sup>25</sup>によると、「當時は其の洗出しと云ふものは噴霧器と云ふやうな便利なものはなくて刷毛を以て洗つたものです。其の水を換えるのが非常に困難で、水を換えなければ洗ひの仕上がりが悪いと云つて、當時の監督者は苦心したものであります。」

<sup>19</sup>人造石(人造石洗出し又は人造石研出とも)の伏せ込み、モルタル打放し床仕上げの押え用に使用する。普通の鏝に比し肉厚大で硬い。参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版) 株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年、pp.190。

<sup>20</sup>普通の柳刃に比し幅がせまい。硬質の鉄でつくられ、人造石の伏せ込みや目地棒貼付けに使用する。参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版) 株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年、pp.187。

<sup>21</sup>モルタル全般、石膏中塗り、漆喰や土の塗付け等、用途は幅広い。大壁塗り付けでは9寸～1尺、中塗り及び上塗りでは6寸～8寸程度のものが主流。焼きが甘い為、鏝が滑らなくて平滑に塗りやすい。参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版) 株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年、pp.193。

<sup>22</sup>煉瓦積の場合にトロをすくうのと煉瓦を割るのに用いたのでこの名があるが、通常の左官工事で材料をすくうのにも使用する。参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』(改訂増補版) 株式会社工業調査会発行、1971(昭和46)年、pp.187。

<sup>23</sup>台湾左官職人陳金福氏と陳適庸氏のインタビュー(1999年8月3日、台北県板橋)。

<sup>24</sup>台湾左官兼石工職人李自然氏のインタビュー(1999年4月20日、台北県淡水)。

<sup>25</sup>尾辻國吉、「台湾建築界の回顧」『台湾建築會誌』第十五輯第四號、台湾建築學會。1943(昭和18)年、pp.133-136



【図 1-52】灰匙（筆者撮影）



【図 1-53】塗付け鏝（筆者撮影）



【図 1-54】角鏝（筆者撮影）



【図 1-55】台湾土糊兼剪粘職人の使用する鏝（筆者撮影）



【図 1-56】台湾土糊兼剪粘職人の使用する鏝（筆者撮影）



【図 1-57】塗付け鏝を使う（筆者撮影）

#### 4. その他の左官工具<sup>26</sup>

両頭さじ（蛇腹の入隅仕上げに用いる。切付け・面引きなど数種のこてを持つわりにこの形のさじを2種類持てば4種のこての役をする）。左官用墨つぼ（大工の墨つぼと異なるところほ、左官用ほ壁の隅へ糸を接しななければならないから、糸の出口が細長く突出している点である）。プラスター刷毛<sup>27</sup>などである。



【図 1-58】両頭さじ（筆者撮影）



【図 1-59】両頭さじ（筆者撮影）



【図 1-60】左官工具（筆者撮影）



【図 1-61】左官工具両頭さじの実演（筆者撮影）



【図 1-62】左官工具両頭さじの実演（筆者撮影）

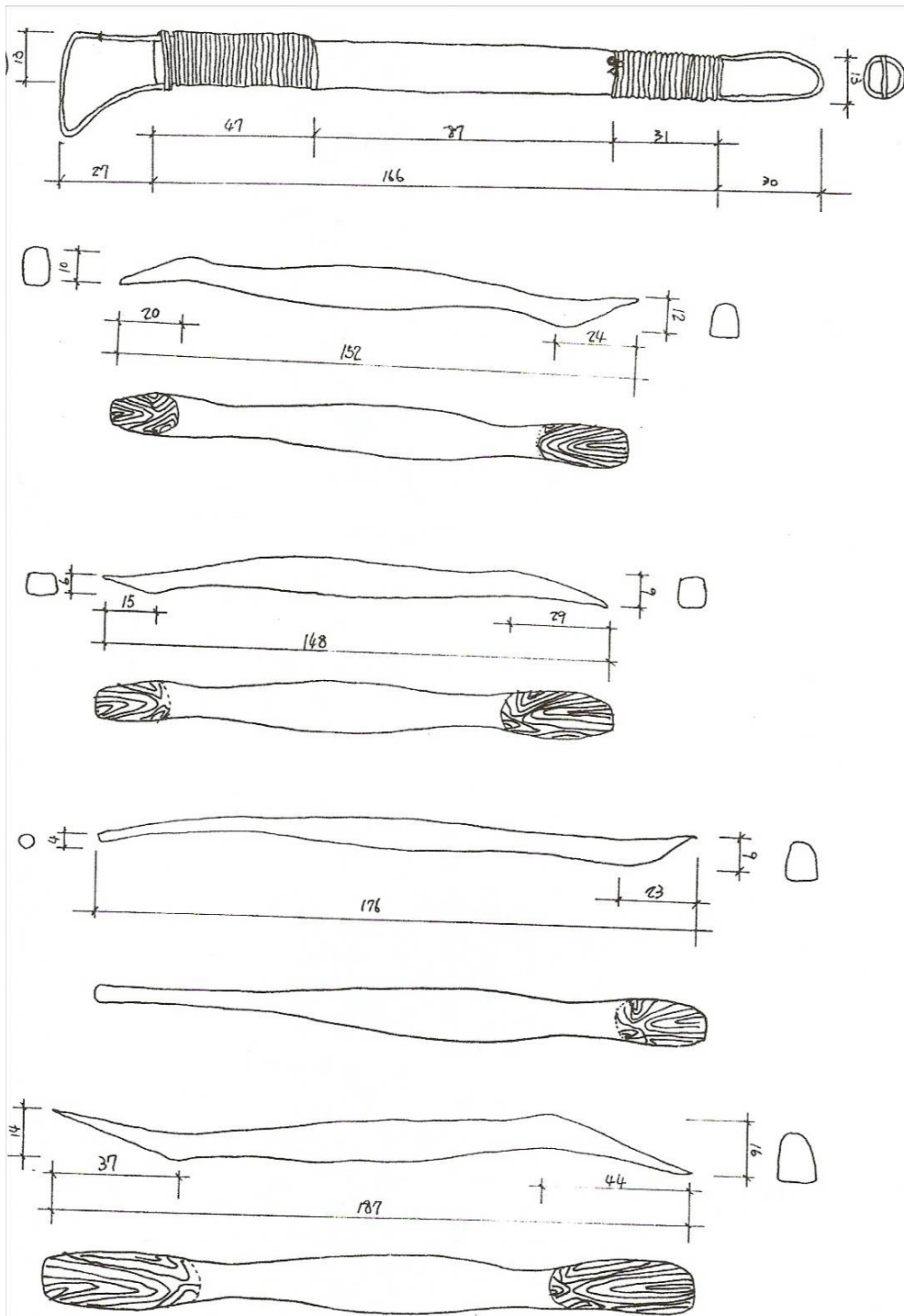


【図 1-63】左官工具両頭さじの実演（筆者撮影）

<sup>26</sup>参照山田幸一、『左官工事 材料と施工法』（改訂増補版）株式会社工業調査会発行、1971（昭和46）年、pp.183-193。

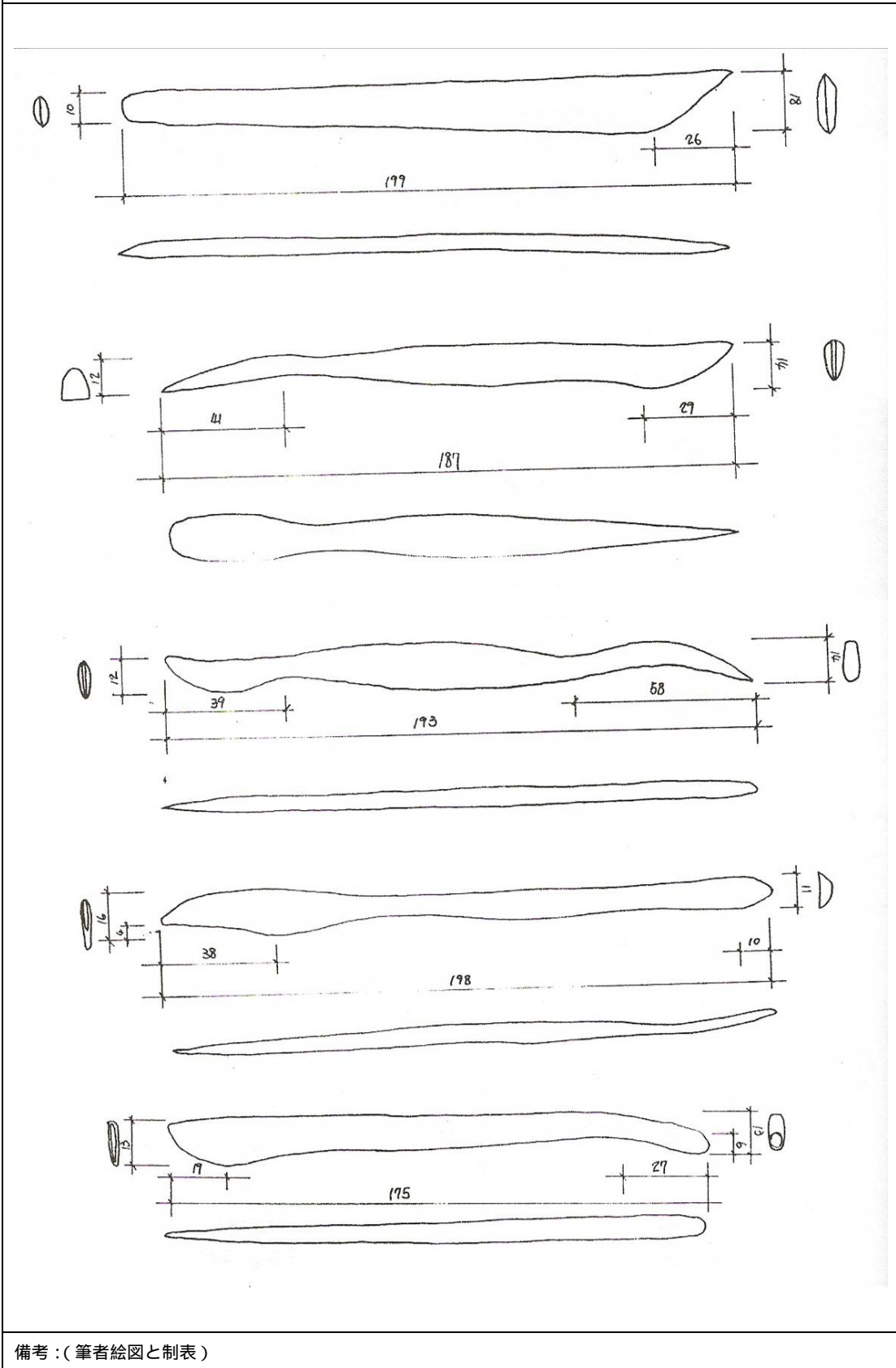
<sup>27</sup> プラスター（石こう・ドロマイトとも）をこて押えて仕上げた後の艶を消すのに使用する。刷毛はいろいろな用途に使われます。道具を洗うものから、モルタルや仕上材に模様付けするために使うものなどいろいろある。

【表 1-1】郭三川左官道具の測量紀錄



備考：(筆者絵図と制表)

【表 1-2】郭三川左官道具の測量紀錄



備考:(筆者絵図と制表)

## 二、種石材料の種類と来源

人造石塗りの材料は「種石」及び「調合材料」に分けられる。種石は寒水石・宜蘭石・特白石・青石・赤石・黄石・黒石及び生物類の貝殻・蠣貝などを含む。調合材料はセメント・石灰・石粉・色粉及び昆布を指す。両者は補い合う関係を形成している。最後は各地方で使用する人造石洗出し材料の特色を分析し、またその変移過程と特色分析を研究する。

「寒水石(かんすいせき)」は『建築材料集覧』に「寒水石と大理石に同じ」大理石世界にも最も著名なるはイタリア産で。本邦に於ては美濃国赤坂稱金山に大量を産出し、常陸・下野土佐等に垂ぐ。常陸国真弓・美濃国赤坂・長門・陸前等より出鶴物は俗に寒水石と稱へて白色である」<sup>28</sup>と記されている。当時日本で流行していた左官材料の言葉に学び、これを取り入れた。台湾の寒水石(かんすいせき)は台湾東部でよく採れ、価格も最も安いことから、最も広く使われている。



【図 1-64】寒水石 (筆者撮影)

【表 1-3】昭和十一年七月『人造石砂利』價目表<sup>29</sup>

人造石用砂利(2斗入 1俵替)

花岡	.65	寒水	.6
蛇紋	.70	赤間	4.50
黒寒水	2.00	青貝黒	3.60
・・ヤ(1斗5升入)	.80	那智砂利	3.00
大磯	.65	矢倉五色石	3.85
・・・一・・・	.75	砂利	.55
白龍石	.75	・・一・	1.70
萬成花岡	1.15	鑄花岡	1.10
・・・	1.90	文化石	.90
葡萄石	1.05	大黄石	1.20
紅葉石	1.35	黒大理石	1.70

台湾の「宜蘭石」は、日本時代から現在まで、最も人気があり、よく使われている。台湾東部で産出され、川底、川辺、及び川と海の境界上にある砂浜で直接採取する。採取後、選別網

<sup>28</sup>松本甚三、『建築材料集覧』、東京：太陽堂書店、1928(昭和三年)年、pp.181-182

<sup>29</sup>筆者製表、1999/10/2。資料来源：「東京大阪建築用諸材料-時價表」、『建築世界 第XXX卷 第七號』、1936(昭和十一年)；建築世界社：東京。



で粒の大きさを分類する。機械で押し潰さないため、石本来の模様と構造が保たれている。

「特白石」は初期によく見られた材料である。価格は比較的高いが、純白でツヤがあり、広く愛用されている。台湾東部玉里・和平・西林・萬榮・光復・瑞穂で産出され、特白石の直径は7ミリから1センチ・2センチ・3センチである。

「蛇紋石」は、戦後大量に使用され、時代とともに使われる粒が大きくなってきている。人造石洗出しに使用される時には、一般に比較的颜色の濃い物は、下部に使われ(落ち着きがある)、薄い物は上部に使われる。

「黒石」と黒大理石に同じ。「黒石」は直径7ミリから1センチ・1センチ半で、多くは他の石と混ぜて使用する。人造石洗出しに使用される時には、一般に比較的颜色の濃い物は、下部に使われ(落ち着きがある)、薄い物は上部に使われる。

「玫瑰石(赤石)」は、1930年代以降、使用されるようになった。「玫瑰石」は直径1ミリから1センチ半で、価格は比較的高いが、表面は赤で輝きがあり、広く愛用されている。台湾東部花蓮山脈で産出され、玫瑰石の直径は7ミリから1センチ2ミリ・1センチ半・2センチ・3センチである。

「煉瓦碎石」は、洗石子の年代を特定する際に、重要な参考資料となる。「煉瓦碎石」は、戦後現れ、1960～1980年代に最盛期を迎え、現在では見られない。これは直径7ミリから1センチ・1センチ半で、多くは他の石と混ぜて使用する。

「貝殻」と「カキ貝」は、台湾南部沿海地区の町村に多く分布し、容易に手に入るため、よく使われてきた。人造石洗出しに使用される時には<sup>30</sup>、まず、貝殻を直径1センチに押し潰し、壁に塗り付ける。表面は純白で輝きがあり、太陽の光に若干反射し、視覚的効果が非常によい。



【図 1-65】宜蘭石 (筆者撮影)



【図 1-66】特白石 (筆者撮影)



【図 1-67】蛇紋石 (筆者撮影)

<sup>30</sup>参照左官工陳金福職人のインタビュー(2009年10月31日、台北県板橋)。

### 三、調合材料の種類と変遷

人造石洗出しの調合材料はセメント・消石灰・貝灰・石粉・顔料・苧及びノリを指す。調合材料種石と種石は補い合う関係を形成している。セメントは近代都市における構造物を支える構造材料である。強度・剛性・耐水性・耐火性など建築構造材料としての優れた特質を有している。消石灰は、ポルトランドセメントが使用される以前における主要な左官用結合材料であり、壁表面の仕上げはもちろん、古代のタイルである煉瓦や屋根瓦を取り付ける接著材としての役割を果たしてきた。

貝灰は、消石灰を製造するときの原料である石灰石の代替として、カキ殻などの貝殻を用いて製造された消石灰であり、化学的には基本的に消石灰と同じである。したがって貝灰は古くから左官材料として使用されてきたが、貝殻を集めるのに人手を要するため、現在はあまり生産されていない<sup>31</sup>。顔料は一般に金属の化合物であり、その性質は無機質混和材に類似は無機質混和材に類似している。苧は、葉壁塗りの際、鏝離れを容易にするためおよび塗上げ後の乾燥に伴う亀裂防止のために混入する。

漆喰の種類は、職人個人の配合の好みや仕入れ先の事情によって各地域で異なるが、基本的には石灰を主原料として麻等を一定の割合で加え、更に人の手で糊状に搗き、餅のような粘りが出るか、油分が出てくるまで混ぜる。もち米の絞り汁を加えると漆喰の粘りや凝固力が増し、海藻抽出物のペーストを加えると漆喰の乾燥収縮によるひび割れの発生を減らすことができる。

セメントが徐々に普及してからは、セメントを少々加えて硬さと粘り気を出すようになった<sup>32</sup>。漆喰が固まる前に表面に絵付けを施すか、漆喰を配合する時点で先に色素粉を混ぜて、多様な色彩の作品にすることもできる。



【図 1-68】消石灰（筆者撮影）



【図 1-69】稲の殻（筆者撮影）



【図 1-70】苧（筆者撮影）



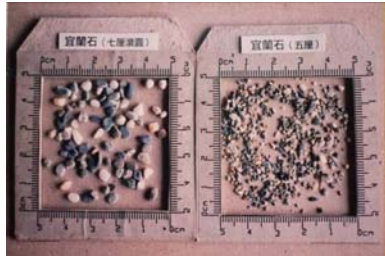
【図 1-71】石粉（筆者撮影）

<sup>31</sup>参照左官職人陳適庸氏のインタビュー（1999年7月、台北県淡水）

<sup>32</sup>昔はセメントは価格が高いため大量には使用できない。（左官工陳金福のインタビュー、2009年10月31日、台北県板橋）



【図 1-72】寒水石 (筆者撮影)



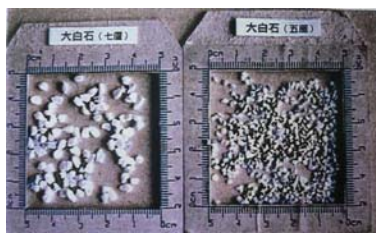
【図 1-73】宜蘭石 (筆者撮影)



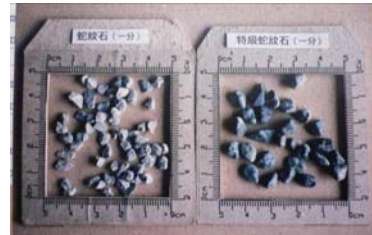
【図 1-74】宜蘭石 (筆者撮影)



【図 1-75】特白石 (筆者撮影)



【図 1-76】大白石 (筆者撮影)



【図 1-77】蛇紋石 (筆者撮影)



【図 1-78】玫瑰石 (筆者撮影)



【図 1-79】大理石黒 (筆者撮影)



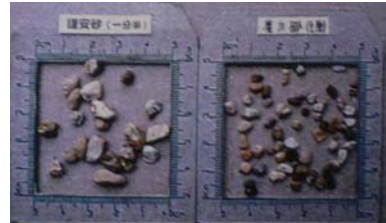
【図 1-80】老古石、貝殻、かざり殻 (筆者撮影)



【図 1-81】黄金石、雲彩石 (筆者撮影)



【図 1-82】珊瑚石 (筆者撮影)



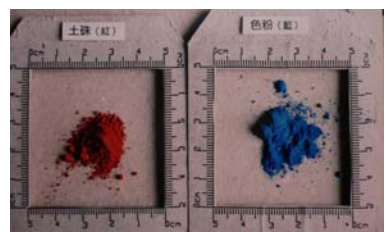
【図 1-83】捷安砂、魔力砂 (筆者撮影)



【図 1-84】馬安石、彩虹石 (筆者撮影)



【図 1-85】石粉 (いしこ) (筆者撮影)



【図 1-86】顔料 (筆者撮影)

#### 四、人造石塗り材料の地域特色分析

##### 1. 大溪

桃園県大溪の街並みは大正8年～9年に建設された。種石として主に寒水石を使用しており、44個の標本のうち31個で寒水石が使用されている。次に多いのは特白石で、これはそのうちの6個を占める。寒水石の特徴は粒が大きいことである。ホワイトコンクリートによって清々しい白い色を表現し、その白さは特白石と呼応している。この外に特別なのは「特白石、黄石、黒石」・「特白石・黄石」・「特白石、黒石」等の3つのケースであり、洗い出し石の外観と質感は非常に近く、同じ職人による芸術であることを垣間見ることが出来る。

##### 2. 老湖口

新竹県老湖口の街並みは大正2年～4年に建設された。調査サンプルから26個のケースを分析したところ、約8割を寒水石が占めていた。またこれらは配合の種類により3つに分類することができた。1つ目は「大白石（寒水石の一種、石の白さは特白石と寒水石の中間）、黒石、黄石」が主となる。これには黒石と黄石の色彩を目立たせる効果がある。2つ目は黒石を主として特白石と黄石を混ぜ込んだコントラストのある表現法である。3つ目は「特白石に赤い色素」を混ぜ込み、赤い色を作り出している。これの多くは額や文字の作成に使用され、壁や柱への使用頻度は高くない。



【図 1-87】大正8年～9年に建設された桃園県大溪の街並み（筆者撮影）

### 3. 宜蘭

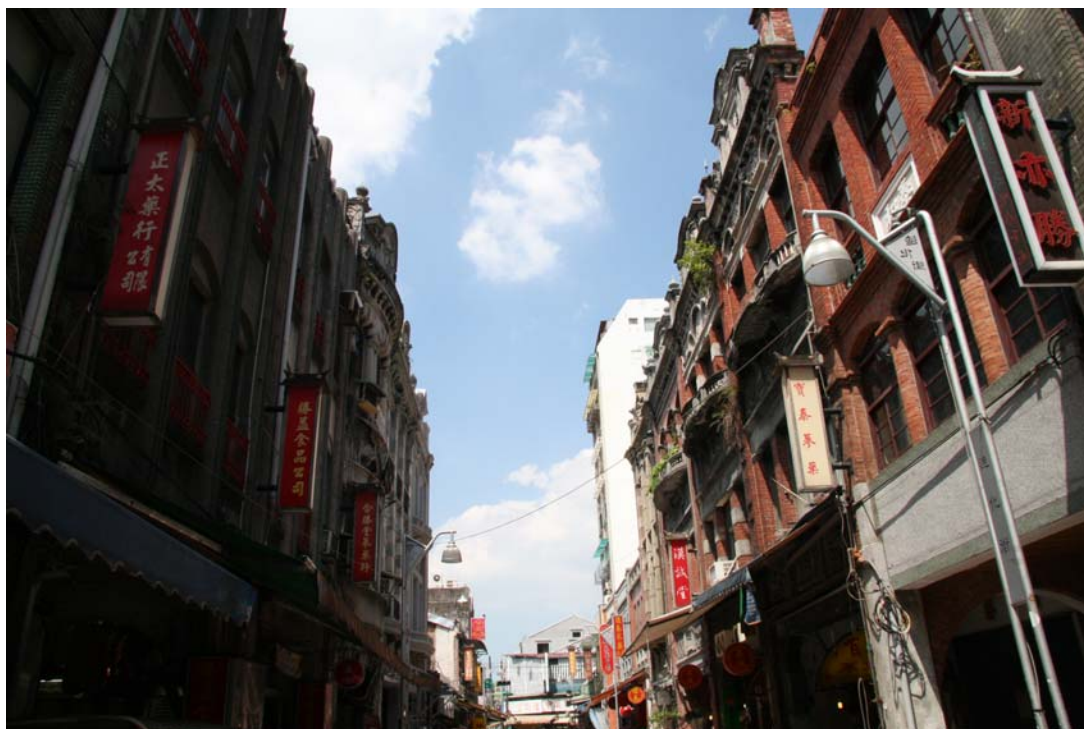
宜蘭市の街並みはおよそ1940年代に建てられた。現場調査では多様な特色のある種石を見つけることができた。注目すべきことは寒水石が1割しか含まれていなかったことである。宜蘭、花蓮付近では、多種多様な種石を産出しているため、他の場所のように大量に寒水石を使用しなくとも、その地縁を生かした様々な石を選択することが可能であった。バラ石（赤石）と他の石の組み合わせは良く見る作成法である。組み合わせには「赤石・特白石」「黄石・赤石・黒石」「赤石・黒石」等を用いる。この多くは壁やレンガの脇に用いられる。1種類のみのも種石で洗い出しを行うことは無く、少なくとも2種類以上を組み合わせで作成する。

### 4. 基隆

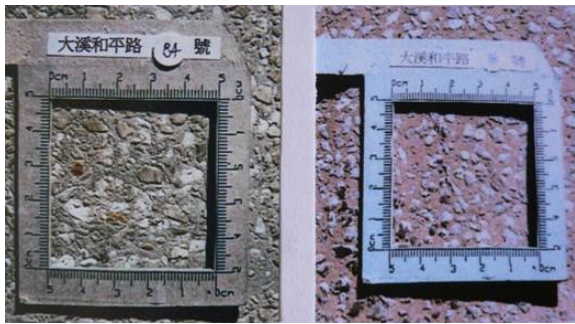
基隆市の街並みはおよそ1940年代に建てられた。黒石がサンプルに広範囲にわたり含まれていた。黒石は主に飾りつけに用いられる。基隆と宜蘭は隣接しており、このため基隆に於いても種石の種類が豊富であった。

### 5. 台北大稻埕

台北大稻埕の街並みは、寒水石・宜蘭石・特白石・蛇紋石・煉瓦碎石・黄石・黒石があり、これは種石に蛇紋石を主に使用しており、ここでは商業需要が旺盛であるため、1階の門構え部分の飾りは何度も変更され、かつての古い風格はない。サンプルの中では蛇紋石が最も多いが、2階以上の部分では美観が重視されるため、多くは4種類以上の種石を組み合わせで作成されていた。



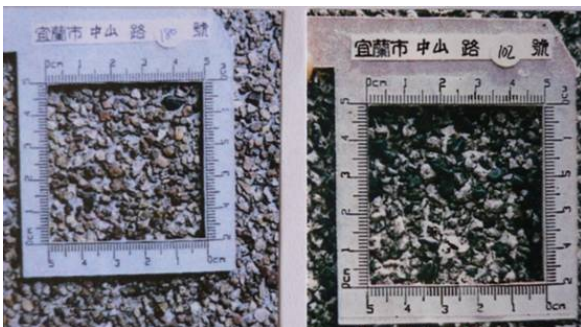
【図 1-88】大正年間に建設された台北大稻埕の街並み（筆者撮影）



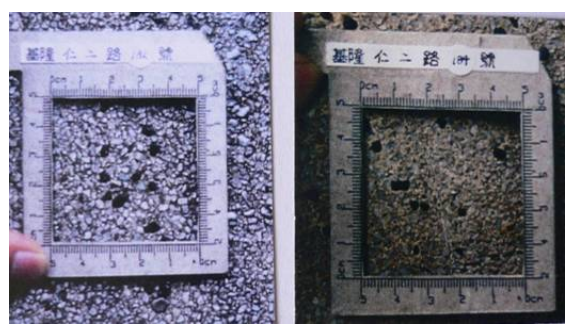
【図 1-89】サンプル G-39 (左)、サンプル G-42 (右) (筆者撮影)



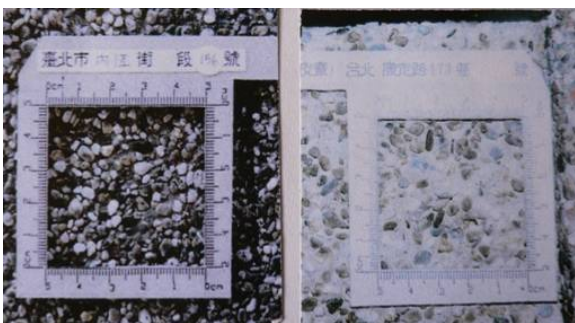
【図 1-90】サンプル F-19 (左)、サンプル F-12 (右) (筆者撮影)



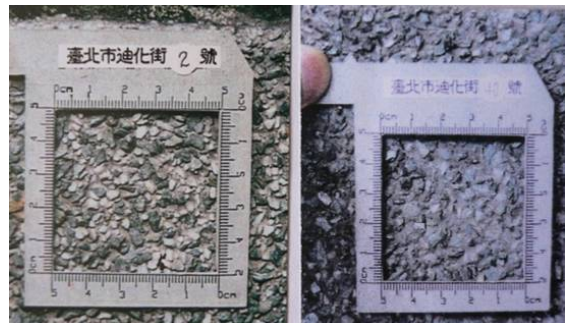
【図 1-91】サンプル A-11 (左)、サンプル A-9 (右) (筆者撮影)



【図 1-92】サンプル B-6 (左)、サンプル B-7 (右) (筆者撮影)



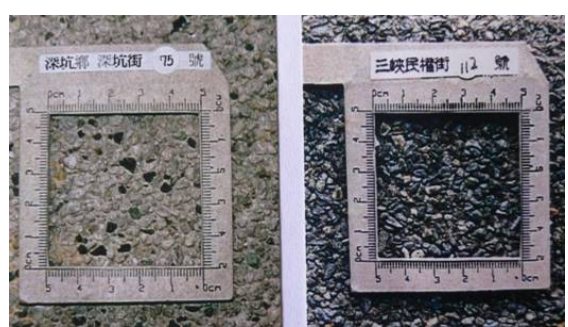
【図 1-93】サンプル C-4 (左)、サンプル C-26 (右) (筆者撮影)



【図 1-94】サンプル D-2 (左)、サンプル D-13 (右) (筆者撮影)



【図 1-95】サンプル E-17 (左)、サンプル E-15 (右) (筆者撮影)



【図 1-96】サンプル E-2 (左)、サンプル E-28 (右) (筆者撮影)

### 第3節 人造石塗りの意義、分類と技術の継承<sup>33</sup>

本章ではまず人造石洗出しの意義を述べ、また「平面の人造石洗出し」・「土糊の人造石洗出し」及び「型製造の人造石洗出し」の三種類に分けた。そして台湾人造石洗出しの出現と運用の研究を行い、最後は職人技術の継承・位置づけについて記す。

#### 一、人造石塗りの意義

人造石と言うと、『建築材料集覧』<sup>34</sup>によると人造石は「人造石 セメントに砂少量と石粉とを水に加合して所要の形状色合等に凝固させたもの。天然石に代用せしむる市場品は此のセメントと砂との中に花崗石粉・大理石粉・蠟石又は赤色石・青梅石の如き或は種々の顔料を混じて製するものである。」当時の人造石の種類はラムソン人造石 (Ransomes artificial stone)・ビクトリア人造石 (Victoria stone)・人造石灰石・人造大理石などである。

『建築材料集覧』によると「人造石は人工品なるを以て如何な炉形にも任意に造れ又工事に際しては所要の品を迅速に得られ、且つ運搬費と時日を要すること少くして価も廉なる上に、材質も往々天然石に勝るものがある。」<sup>35</sup>人造石は人工品であるため、どのような形にも作ることが出来る。また、納入までにかかる日時が少なくて済み、工事に必要な品を迅速に入手できる。しかも、品物の価格や運搬費が安く、材質も天然石に勝っているものがある



【図 1-97】外壁部の人造石 (筆者撮影)



【図 1-98】人造石塗 ((筆者撮影))

人造石塗は人造石の一種である、人造石塗はセメントに細砂・石粉と水などを混ぜ合わせ、必要な形によって、色付けてから凝固させると完成となるが、石造建築の質感を模倣することが出来るため、天然石材の代用品として使用される、ゆえに人造石洗出し・人造石研ぎ・人造石切りなどの改装技術は、全て人造石塗の工法の一つであって、近代建築によって発展した施工技術に属する。

<sup>33</sup> この節については、一般社団法人 日本左官業組合連合会の HP (<http://www.nissaren.or.jp/>) 及び一般社団法人 島根県左官工業協同組合の HP (<http://www2.crosstalk.or.jp/>) を参照した。

<sup>34</sup> 松本甚三、『建築材料集覧』、東京：太陽堂書店、1928(昭和三年)年、pp.129-130

<sup>35</sup> 松本甚三、『建築材料集覧』、東京：太陽堂書店、1928(昭和三年)年、pp.130

昭和4年、当時の建築材料供給者である永坂浅治郎は「...其他は畢竟塗り物である、其塗り物に付ての大體の目的は何れも天然石刻面仕上げの模造であつて、矢張り碎石とセメントを配合して塗つた物を洗ひ出す所謂人造石塗がその大部分を占めて居るやうである、それは云ふまでもなく好みの色石を以て現場に於て随意の形に仕上げる便利と自由とがある上に、費用の點に於ても最も經濟的であるからで、内地のみならず現に本島に於ても外装仕上げとして一番多く設計さるゝ譯はそれが為であらうと思はれる。」<sup>36</sup>と述べている。

このように、人造石洗出しは当時、施工が便利で、工程費用の面でもかなり經濟的であった。しかし人造石塗工事にもただ一つ欠点がある。施工数ヶ月から数年で表面に亀裂が生じるのである。どのように優れた設計や卓越した施工も、または最新の材料の使用も、一旦亀裂が生じてしまえばその美しさを保つことは出来ない<sup>37</sup>。

人造石洗出しは、石材不足を補うために、人造石を發展させたことにより出現した。石材表面の質感を模倣するのが目的だったが、大量に使用され、一般に普及するに従って、別の象徴的な意味を備えるようになった。

1. 天然石の表面の質感を自由に作り出し、模倣することができる。
2. 現場で好みの型を使い、造型・施工できる。速くて便利なだけでなく、自由に造型できる。
3. 工程費用の面で、かなり經濟的。
4. 防災の需要、環境の快適度及び美觀の増進。
5. 使用者の美觀的需要を満足させる。地位、財力の誇示。
6. 風化、湿気の進入による破損等を防ぐ。



【図 1-99】美觀且つ地位、財力を誇示（筆者撮影）



【図 1-100】自由にデザインできる（筆者撮影）

<sup>36</sup>永坂浅治郎、「擬石塗施工に就ての所感」『台湾建築會誌』第一輯第五號、台灣建築學會。1929(昭和4)年、pp.17-18

<sup>37</sup>「人造石塗工事に唯一缺點とするは、施工數年後或は數箇月を経ずして偶々表面に亀裂を來すことである。如何に非凡なる設計も卓越せる施工も且つは進歩せる材料の選定も、この亀裂を來したが最後、空しく葬られて永へ似其の醜態を晒すのを見受ける事の遺憾を痛切に感じるのである。」永坂浅治郎、「擬石塗施工に就ての所感」『台湾建築會誌』第一輯第五號、台灣建築學會。1929(昭和4)年、pp.18



## 二、人造石洗出しの分類

人造石塗りは台湾建築に応用され、多様な組み合わせによる台湾特有の特色ある建築を形成した。筆者の調査研究によると、人造石洗出しは「形式と施工方法」を分類の拠り所とし、「平面の人造石洗出し」「土糊の人造石洗出し」「型製造の人造石洗出し」の三類型に分けることが出来る。(この節については、一般社団法人日本左官業組合連合会のHP<sup>38</sup>、一般社団法人島根県左官工業協同組合のHP及び職人魂2のHP<sup>39</sup>を参照した。)

### 1. 「平面の人造石洗出し」:

「平面の人造石洗出し」は「種石」<sup>40</sup>とセメントの混合でモルタルを作り、建築物の表面に直接塗る。そして、モルタルが乾かないうちに、「噴霧器」を使い、モルタルを洗浄し、種石を表面に露出させる。外から見ると、塗布面の塗り溝、施工溝以外に、如何なる立体的な彫塑も見られない。適した部位は主に外壁部のほか、床・塀・天井などの施工用途がある。構造上大きな力のかかる部位にも適用できる。



【図 1-101】外壁部の平面の人造石洗出し (筆者撮影)

【図 1-102】床の平面の人造石洗出し (筆者撮影)

### 2. 「土糊の人造石洗出し」:

土糊の人造石洗出しは台湾の伝統的な「土糊と剪粘」<sup>41</sup>技法を基に発展したもので、一般的には瓦、或いは鉄線で骨組みを作り、セメントに種石を練り合わせたものを塗り付け、様々な形を作り、装飾し、十分に押さえ込んだものを噴霧器を使い洗い出す。「土糊の人造石洗出し」の中に表現することができた。製作においては、「つまむ、塑像する、積む、貼る、刻む、花を描く」等の技巧が必要で、一定の美学訓練を必要とする。

<sup>38</sup> 参照一般社団法人 日本左官業組合連合会のHP (<http://www.nissaren.or.jp/>) 及び一般社団法人島根県左官工業協同組合のHP (<http://www2.crosstalk.or.jp/>)

<sup>39</sup> 参照職人魂2のHP (<http://www.dougu.co.jp/index.html>)

<sup>40</sup> 「種石 (左官用語)」とは、色のついた石を砕いたもの。混入する種石には、寒水石、宜蘭石、黒石、蛇紋石などの大理石、小砂利などがある。種石の種類によって異なる顔料を用いる。種石とセメント、石灰を練り合わせたものを塗り付け、表面を水洗いすることによって、混入された種石を露出させる。種石の種類や粒度によってさまざまな表情を出すことができ、独特の質感や存在感が得られる。

<sup>41</sup> 「剪粘 (ジェンネン)」とは、端的にいえば、割れた茶碗の破片や色ガラスなどを再利用して必要な形に刻み、作品の表面の一つ一つ丁寧に貼ることによって作られる装飾のことである。



【図 1-103】土糊の人造石洗出し（筆者撮影）



【図 1-104】土糊の人造石洗出し（筆者撮影）

### 3. 「型製造の人造石洗出し」:

型製造の人造石洗出しは大量に製造するため、「型製造」の技巧が使用されている。何度でも生産でき、現場で接合して完成。「型製造」はセメントに種石を練り合わせたものを塗り付け、或いは石膏を型に入れて成型し、セメントが乾かないうちに、型から取り出し、装飾し、十分に押さえ込んだものを噴霧器を使い洗い出す。



【図 1-105】型製造の人造石洗出し（筆者撮影）



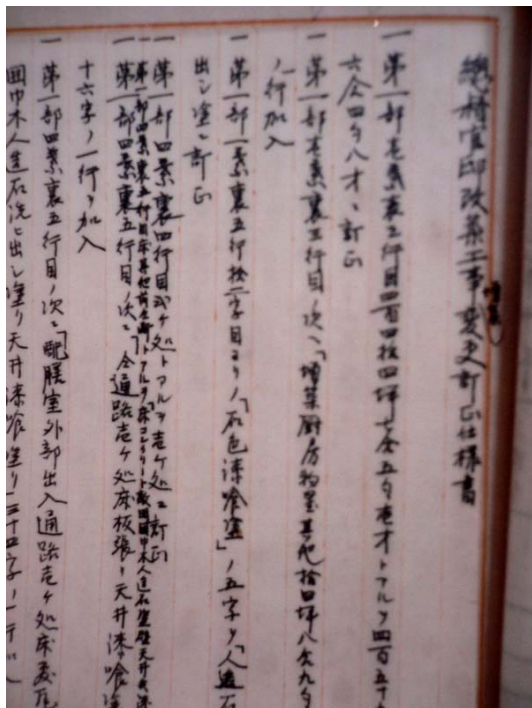
【図 1-106】型製造の人造石洗出しの型（筆者撮影）

### 三、台湾人造石洗出しの出現と運用

「1900（明治33）年になると、日本人の台湾の伝統的都市に対する改造事業は、次第に完成していった。これに、日露戦争の勝利が加わり、台湾経済は好転し、各種の公共建築物と街並みの建設量も大幅に増加した。」<sup>42</sup>この時期、台湾の建築技術の面に、重要な変化が起こった。つまり、「鉄筋コンクリート」と「日本レンガ」の導入である。これにより、人造石洗出し技術も台湾にもたらされ、これらの構造体の保護、及び装飾材の役割を担うことになった。

『台湾總督府公文類纂』の「病室構造ノ仕様書」<sup>43</sup>の記載によると、最も遅くとも明治34(1901)年の時点で、人造石洗出しは建築物の室内、及び室外の装飾に使われていた。台北市の文化財「水源地唧筒室」は、現存する建築物の中では、最も古い事例である。この後、石造を模造する風潮が生まれた。街並みにおいて、人造石洗出し技術は外壁の装飾に用いられた。最も古いものは、台北本町街並みの改築に見られる。大量の日本人左官工を招聘し、施工された。特に、家屋の建築立面は、家ごとに異なり、華麗極まりなかった。台湾本土の左官達も賞賛し、これに学んだ。

台北本町街並みは、台湾の伝統的な住宅とは全く異なり、民衆の注目を集めた。また、台湾總督府は竣工後、大いにその宣伝を行い、こうした美しい街並みの建設を奨励する一方、植民地での政治的に功績を内外にアピールした。豪華な装飾を施した人造石洗出しの図案は、町々の壁で一種の看板的效果をもたらした。対外的にも、台湾植民地の市街地が躍進的な発展を遂げたと宣伝し、資本主義発展の下、台湾の市街地が繁栄しているイメージを作り上げた



【図 1-107】1901（明治34）年の『病室構造ノ仕様書』



【図 1-108】台北市文化財の水源地唧筒室（筆者撮影）

<sup>42</sup> 李宏堅、「台湾日據時間鋼筋混凝土建築技術與樣式發展間之關係探討」、中原大学修士論文、1994年。

<sup>43</sup> 参考「病室家屋仕様圖」『台湾總督府公文類纂』明治三十四年進退追加第一卷第六門衛生-病院ノ四、1901（明治34）年。



【図 1-109】大稻埕永樂町の市区改正計画（引用旧絵葉書、中原大學近代建築研究室蔵）



【図 1-110】台北本町街並みの改築（引用旧絵葉書、中原大學近代建築研究室蔵）

#### 四、職人技術の継承と職別

日本時代初期、政府は盛んに大挙して家屋、神社等の建築を行った。その際、日本からの職人だけでなく、台湾の職人も建設に関わった。この「雇用参与」の関係により、台湾職人も訓練されることになった。建築の過程で、台湾の職人達が衝撃を受けたのは、建築用語と様式上の差異よりも、日本の新技術と工法に対してであった。こうして、日本人職人との間に技術伝承のルートが開かれ、民間の工事において、輝かしい発展を続けた。

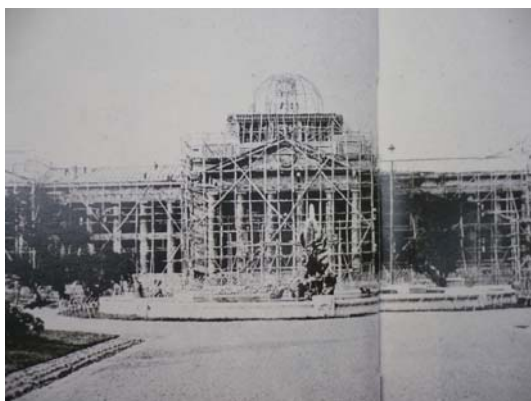
日本人職人の勤勉な態度は、当地職人の仕事の質に対する基準にも影響を及ぼした。指導に関し、日本人職人は技術の伝授を行うとともに、友でもあった。台湾総督府博物館の修繕に参与した郭三川氏は、竣工後、日本人左官工から、友情の記念として左官工具一式を贈られたと言い、両者の心が通じ、友情が生まれたことを示唆している。



【図 1-111】左官兼剪粘職人 郭三川氏（郭互富提供）



【図 1-112】左官兼剪粘職人 郭徳蘭氏（郭互富提供）



【図 1-113】台湾総督府博物館の修繕（引用台湾省立博物館、台北：省立博物館發行）



【図 1-114】贈られた左官工具一式（筆者撮影）

異なる類型の人造石洗出しは、異なる類別の職人が分業で施工を行う。「左官職人」は平面の人造石洗出しを専門的に行うが、少数は型製造の人造石洗出しも担当する。しかし、その模様は簡単なもので、複雑な人物や草花の形態等に至っては、「土糊兼剪粘 (ジェンネン)職人」に及ばない。

台湾の「土糊兼剪粘職人」は、台湾の伝統的な剪粘技術<sup>44</sup>、及び土糊の技巧を元々身に付けており、簡単な訓練をするだけで、西洋建築の技法語彙を模倣し、「土糊の人造石洗出し」の中に表現することができた。製作においては、「つまむ、塑像する、積む、貼る、刻む、花を描く」等の技巧が必要で、一定の美学訓練を必要とする。



【図 1-115】台湾土糊兼剪粘職人（筆者撮影）



【図 1-116】台湾の伝統的な剪粘（筆者撮影）

<sup>44</sup>「剪粘(ジェンネン)技術」とは、台湾と中国福建・広東地区特有の装飾技術。剪粘という装飾技術は、元来、中国の福建・広東地区から伝えられたもので、台湾では寺廟と家屋の装飾に使われてきた。

